

Case 1

オペラ公演『椿姫』の衣装デザイン・制作に参加

第1幕ヴィオレッタのサステナブルな舞台衣装

現代生活学部 生活デザイン学科

オペラ『椿姫』の舞台衣装制作

1. オペラ衣装制作の背景

この衣装制作は、地域連携活動の一環として、平成25年度より公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団主催によるオペラ公演の衣装デザインおよび制作に参加しました。

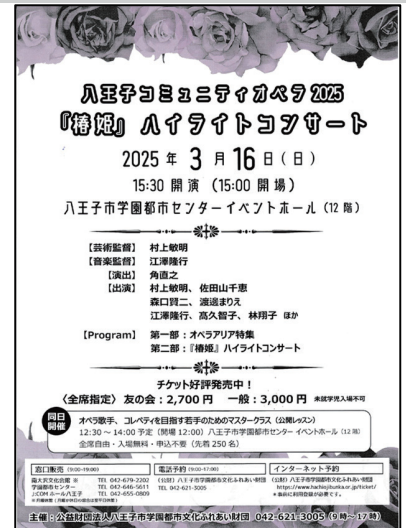
同財団では、平成24年に文化庁より制定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を受けて、プロのオペラ歌手や演出家と共に、社会人および小学生の合唱団と協働し、舞台芸術の普及と若手育成を目的とした市民参加型のオペラ公演を企画、実施しています。

2. 『椿姫』第1幕のあらすじ

オペラ『椿姫』は、初演1853年、イタリアの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディによる作品です。第1幕は、高級娼婦ヴィオレッタのサロンを舞台に、富豪の息子アルフレードが彼女に求愛する場面から始まります。当時の高級娼婦は、美貌だけでなく幅広い教養と、貴婦人に劣らない気品を備え、豪華なサロンに上流階級の客を招いて洗練された社交の場を主宰しておりました。紳士たちにとって、このようなサロンに出入りすることは一種のステータスでもありました。

3. 演出家とのデザイン打合せ

演出家から提示されたデザイン条件は、ヴィオレッタをオペラ『椿姫』全体を通して、その時代の社会およびサロンにおける高嶺の「華」という位置づけを表現することでした。令和6年8月にデザイン画とサンプル生地、その他材料を提示してプレゼンテーションを行い、ご指導等をいただきました。



オペラ『椿姫』のチラシ

材料は、基本ドレスにDXストレッチサテン(白・ポリエステル)を用い、その上にチュールレース(シルバー・ポリエステル)を重ね、ボディス裏地には、汗による収縮を防ぐ目的で、あらかじめ水通し処理を施したチノクロス(白・20番手・綿)を使用しました。



打合せの様子 『ラ・トゥ・ラMAGAZINE』より



第1幕のドレスのデザイン画

4. デザインコンセプト

ドレスの色は、ヴィオレッタの名前に由来するすみれ色の紫を基調として青紫や赤紫に加えて、シルバー、白、アイボリー、緑(葉)などの色彩構成とし、大小さまざまな造花をあしらいました。また、19世紀中頃のイヴニングドレスの様式で、裕福な女性が着用していた胸元を大きく開けたデコルテと、華やかさを強調した大きく広がったスカートのクリノリンスタイルとしました。

さらに、サステナブルな衣装として、ボディスの背面の開きには、右の写真のようにレースアップ(紐で締める方法)でバストサイズの調整を可能にし、多数のキャストによる着回しも考慮しています。また、オープンコンシールファスナー(白)を付けて着脱をしやすくしました。



完成したドレスの装飾「花」の視覚的効果とヘッドドレス



オペラ公演で使用した衣装

演出家からのデザイン条件はヴィオレッタを「華」として表現することです。彼女の名から基調色を紫とし、19世紀半ばの華やかなクリノリンスタイルのドレスを制作しました。

装飾の造花240個は一つひとつ手縫いで留め、立体的な花の集積による視覚的効果を追求しました。その効果とは、花々が隙間なく咲き満ちるように見せるため、造花の下地に紫系の花柄プリント生地を敷き、実際の装飾数以上に花が広がって見えるような視覚的錯覚(錯視)効果で密度のある印象を創りました。

音楽と演劇が一体化したオペラ

オペラ公演は、音楽(歌唱)、文学(脚本・歌詞)、演劇(演技)、美術(舞台装置・衣装)など、複数の芸術要素が融合して成立する総合舞台芸術です。音楽とドラマを核としながら、それぞれの要素が有機的に結びつくことで、舞台上に豊かな世界観を創出します。

本公演は、主催である八王子市学園都市文化ふれあい財団のもと、演出家、舞台監督、音楽監督、演奏者、合唱団、舞台美術、衣装、ヘアメイクなど多くの専門家が学生たちとの協働によって制作されました。



八王子市学園都市センターイベントホール(12F)にて

プロジェクト概要

- パートナー
公益財団法人八王子市学園都市文化ふれあい財団
- 担当教員
現代生活学部 生活デザイン学科 教授 富田 弘美
- 学生
現代生活学部 生活デザイン学科
2年生 1名
4年生 1名 計2名
- 実施期間
令和6年4月～令和7年3月
オペラ公演 令和7年3月16日